

定形衛先生は、本年3月をもって、名古屋大学教授の職を退かれました。
ここに同先生の肖像を掲げて、多年にわたる本研究科へのご貢献に対し、
厚く感謝の意を表します。

名古屋大学大学院法学研究科



定形 衛 先生

惜別の辞

定形衛先生は、2019年3月末日をもって名古屋大学大学院法学研究科を定年退職されました。先生は1998年4月に名古屋大学法学部に教授として着任後、総合法政専攻長（2004年4月～2005年3月）、評議員（2005年4月～2007年3月）、研究科長（2012年4月～2014年3月）を歴任し、法学部・法学研究科の発展に尽力されました。研究科長の任にあった時期には、キャンパス・アジア、キャンパス・アセアン、リーディング大学院、卓越大学院などの大型プログラムが立て続けに動き始めました。定形先生は、これらのプログラムの立ち上げのために研究科内外の折衝と調整に取り組み、人員と場所の安定的な確保をはじめとする様々な課題に対処し、すべてのプログラムの円滑な運営に心を砕き、粉骨砕身の仕事をなさったのでした。

教育面では、「国際政治史」の授業のほかに、「国際政治学」、「現代日本の外交・国際関係」（以上、法学部）、「Contemporary Japanese Diplomacy」（G30）、「国際政治研究」（総合法政）、「Comparative Studies in Politics」（国際法政）、「現代世界の政治」（法科大学院）などの授業も担当なさりました。なかでも「国際政治史」では、多くの受講者に対して熱意あふれる講義を長年にわたって続けてこられました。

定形先生の研究は、(旧)ユーゴスラヴィアの国際政治を主なテーマとして、長いものに巻かれない批判精神、過酷な現実のなかにも理想と希望の灯火を見出そうとするバランス感覚、そして学問に対するほとばしる情熱によって特徴づけられるでしょう。その研究は何のための、そして誰のための国際政治(学)かを問い続けるものであり、この姿勢は師の一人である故・木戸蒨教授の姿勢を受け継いだものでしょう。定形先生が師の学問を振り返った論文「木戸蒨——社会主義国際政治論と権力政治の克服」(2017年)は、その分析視角を「大国間権力政治、社会主義、民族問題という国際政治の主要課題を横軸に、『歴史研究』『現状分析』を縦軸にして分析を進めてきた。そのきめ細かな分析は、独自のすぐれた均衡感覚と異質なるものへの誠実さに支えられ、大国間政治、社会主義国際関係、民族主義にあらわれた権力批判を正面に据え、社会主義の実態と理論上の問題

点を鋭く衝いたものとなっている」と評価したうえで、「木戸の提示した分析視角をさらに深め、東欧の多様性、後進性、大国介入の新たな側面を、世界史の今日的な変動過程のなかで考察していかなければならない」と結んでいます。定形先生の研究はまさに、この横軸と縦軸が織りなすものと言えるでしょう。以下では、比較的最近の論文三篇を取り上げて、定形先生の研究の一部を振り返りたいと思います。

「旧ユーゴスラヴィアの終焉と人間存在の変容」論文（2015年）は、国際政治の重要性——それが国家に、そしてそこで暮らす人びとの生活と生命に、甚大な影響を及ぼす態様——を以下のように表現しています。

「『人間存在』は、国家の政治経済体制や国際環境、地政学的位置や民族の文化・歴史によって大きく規定され、人びとは国家の内外政策のもとで、日々自らの生活を築き、社会生活をおくっている。どのような国家の成員か、いかなる民族の構成員か、さらに当該社会のいかなる社会的階層に位置するかなどによって、人間は、その意志やイデオロギーにかかわらず、社会的権利や経済生活、平均余命や健康状態、学校教育や情報伝達、さらには、自らの身体的安全や戦争への動員など生死にかかわる問題に至るまで決定されている。」

同論文は、旧ユーゴスラヴィア内戦下での民族浄化という極限状態での人間存在を次のように描きます。「民族浄化に直面した人々の『人間存在』には、存在のあり方よりも存在そのもの、実存の危機が迫ってきた。」「民族存在に規定された人間存在は内戦の帰趨によって、生存と死のあいだを彷徨し続けるしかない存在へと矮小化され、自由と平等、人権といったリベラルな価値を主張することは困難になっていった。」「旧ユーゴスラヴィアの人間存在はヨーロッパ意識とバルカン意識のせめぎ合いのなかで、個として、集団として日々自覚的に捉えられることになった。人間存在はこのように内的、外的な要因に規定されつつ、また他者と自己の相互規定によって日々確認され、構築されているのである。」

以上の見方は国際政治理論の一つである構成主義（コンストラクティヴィズム）に通じますが、定形先生の研究の流儀は既存理論を事例に適用するアプローチとは趣を異にします。定形国際政治学は、自身の眼で見た

(非) 日常の現場がもつ意味を、「人間存在」などの根源的な問題との関連でえぐろうとするものであり、定形先生ご自身の研究者としての、さらに人間としての、存在をかけた苦闘の産物と言えるでしょう。「人間存在」を横軸とし、旧ユーゴスラヴィア内戦を縦軸とした論考を、定形先生は以下のように結んでいます。

「日常性の継続と生活様式の維持の一方で、非日常性の到来と生存の危機への緊張感が襲いかかるのが今日の国際関係、グローバル化時代の人間存在である。個としての尊厳性の獲得と権利の保障、集団としての歴史認識にもとづく誇りのなかで、人間存在は人格として形づくられていくのではないか。その構図は国家についても同様であろう。国家の尊厳性と権利の保障、世界史にたいする国家の歴史認識にもとづいて形成される国家の品位、そうした国家からなる国際関係においてのみ、人間存在が生き生きとした活力ある生活を築けるものになるのではないだろうか。」

この一節は、旧ユーゴスラヴィアという特殊例外的な状況から、日本を含む各国に当てはまる一般的な「真理」を導こうとするものだと言えるでしょう。

「戦争の記憶と子ども——ボスニアの学校教育を事例に」論文（2009年）は、何のための、そして誰のための歴史教育かという問いを横軸とし、国際政治と国内政治の趨勢に翻弄される子どもという存在を縦軸としています。論文はまず、内戦と民族浄化を経験したボスニアの子どものように捉えます。

「繰り返された民族浄化、都市への砲撃、夥しい数の難民、避難民の流出のなかで、子どもは恐怖に震え、逃げ惑い、そして難民の隊列に加わった。子どもは常に、直接的であれ、間接的であれ、武力紛争の影響を真っ先に受け、紛争は多くの面で子どもの生活を一変させる。身体的、精神的な痛みと恐怖、貧困と欠乏の恒常化、さらに保護し愛してくれた人との離別、こうした戦争による子どもたちの体験は、時に『トラウマ』となって正常な心身の発達を阻害した。子どもは戦争にあって最も傷つき

やすく、立ち直る力も最も弱い。そのうえ戦争は凄惨な記憶となって、その後の子どもの自己形成に大きな影響を及ぼすことになる。とりわけ、民族間の対立と憎悪を身近に経験する内戦の場合、子どもたちは、戦後も敵と味方双方を隣人とし、戦争の記憶をとどめつつ、アイデンティティを形成し、同時に人間観、社会観さらに世界観をも確立していかなければならないのである。」

つづいて論文は、ボスニア内戦後の歴史教育を確認します。「紛争後の『分断教育』で象徴的なことは、紛争前には『私たち』として教えられた人たちが、紛争をへて『かれら』として教えられることである。紛争まで『われわれユーゴスラヴィア人は』と教えられた国民は、今日では分断され、敵対する『他国の国民』として教科書にあらわれている……。」「ボスニアにおいて、子どもたちの『戦争の記憶』は、分断の教育システムのなかで、決して癒されることはなく、今日においても、共存と和解を目指す教科書、教育システムが提示されているわけではない。」

論文は、このシステムの「焦眉の課題」として「困難のなかにあっても民族の共存を導いてきたボスニアの歴史を確認し、内戦時の子どもたちの経験と記憶を相対化し、『分断の記憶』を『共存の歴史』のなかに位置づけていくこと」を挙げたうえで、「ボスニアの子どもたちへの期待」を次のように述べています。「つねに狭隘な民族主義を跳ね返してきた民族の歴史をこそ、現在のボスニアの子どもは記憶にとどめるべきである。対立と憎悪、分断の記憶は忘れることはできなくても、歴史に正しく位置づけられる時、許しあえるようになるのではないだろうか。」この一節は戦争の記憶と戦後和解に関わるものであり、ボスニアという一事例を超えた意味と意義をもつと言えるでしょう。

「旧ユーゴスラヴィアにみる『暴力と利益』の国際政治」論文（2014年）は、国際政治学の重要な概念である「暴力と利益」を横軸に、そして旧ユーゴスラヴィアの形成から崩壊までの歴史を縦軸としています。論文はまず、「現代の国際政治（学）の焦眉の課題」を指摘します。それはすなわち、様々な暴力——「内戦、民族浄化、地域紛争の頻発、空爆や武力行使による人道的介入、さらには対テロ戦争など」——と「国家、国際機構、地域秩序、民族、社会集団、個人といったレベルの『利益』」とがいかに絡み合っ

いるかを分析したうえで「紛争解決の方途を指し示すこと」です。その問題意識は、冷戦後に頻発する「新たなタイプの暴力」に対して、外科手術的な空爆を支持することにも、「平和構築」や「民主化支援」などの紋切り型の処方箋を書くことにもなく、「暴力と利益」の多層的な連結——病理学的な比喩を用いれば、多因子性疾患、合併症、症候群と言えるかもしれません——を丁寧に分析し診断することにあります。

同論文は、「ソ連の陣営外交……東西対立……冷戦後の国際社会大国の介入」などの「大国間国際政治の『暴力と利益』……にみられる論理、大国間の対立や矛盾が、ユーゴスラヴィアという小国、東西に挟撃される国家、あるいは紛争後の国家建設の歩みに、集積する形で表れた」ことを指摘しています。いわば、大国というプレートの境界に位置するがゆえに蓄積されたひずみと旧ユーゴスラヴィア国内の「非妥協的な『民族政治』」や国際機関の介入などが共鳴することにより、旧ユーゴスラヴィアの内戦と民族浄化が発生し展開する過程が、ここでは多層的・複線的・動態的に描かれています（このような視点は、第一次世界大戦の原因について Jack Levy が「非線形的合流(nonlinear confluence)」と呼ぶものと軌を一にしています）。

論考は、このような旧ユーゴスラヴィアを「犠牲者」とか「弱さや悲劇」といった物語として見るのではなく、「旧ユーゴスラヴィア外交の『挑戦の現実』と『解体の内在的原因』を冷徹に分析し、旧ユーゴスラヴィアを現代史のなかで正当に位置付けること」が重要だと説きます。それは、学術的観点からだけでなく、旧ユーゴスラヴィアの人びとの観点からの主張でもあるのです。「この紛争を、バルカン特有の『民族間の歴史的憎悪』などと歴史に記述することでは、『民族浄化の犠牲者』『故郷喪失のディアスポラ』『さまよえるユーゴスラヴィア人』の魂は永遠に浮かばれることはないのであるから。」この論文は定形国際政治学が何のための、誰のための学問かを明確に示す一里塚として、広く読まれるべきです。

法学部は、次世代の研究者を育てるために Equip MIRAI プログラムを創設し運営しています。その受講者に対して、定形先生は「方法としての国際政治史」と題したショート・レクチャーを2018年10月に行いました。それは、先生の研究者としての、そして教育者としての、集大成と言えるものでした。以下に、レジュメの一部を引用します。

- ・ 「国際政治史を学ぶことと自分が生きることがどのように関連するのか」
 - ・ 「時代精神 *Zeitgeist* をしっかり捉えて、時代を丸ごと掴まえて生きていきたい」
 - ・ 「想像力 *Imagination* さえあれば、逆境にあっても生きていけるし、粗食にあっても元気がでるし、そして裏切られても失望せずに生きていくことができるのではないかと。そして何よりも世界の問題を自分の問題としてうけとめて、正しい方向へと歩めることに喜びを感じることができるのではないかと」
 - ・ 「現象を正確に記述し、それらを再生産する構造／システムを的確に説明し、その背後に潜む『暴力と利益』の結託を暴いて、決して許さず、真に品位ある社会を築いていく姿勢を維持する」
 - ・ 「医師が患者の苦痛を人間的に理解し同情しつつ、診断と治療のためには病気に対して最大限に冷徹な科学者でなければならないのと同じように、社会の問題に立ち向かいたい」
 - ・ 「社会科学では『必然性』をそのまま法則として受け入れる必要はない。必然性が正しいということと同義ではないからである。どのように必然性が導かれたか、いつから必然となったかを考えるべきである」
- レジュメは、彫刻家ロダンの言葉の引用によって締めくくられています。

「根底から容赦なく、真理を語る者であれ。君自身が考えついたことを言い表すのに決して躊躇してはならない。たとえそれが世間の公認する思想に反抗するときであろうとも。初めのうち君は理解されないかもしれない。しかし、君の孤立はつかの間であろう。同志の人たちは間もなく君を訪ねてくるであろう。なぜなら、一人の真理は、万人の真理であるから。」

研究対象に自分を投げ入れ、対象と客観的に、しかし共感をもって向き合いながら、さらに対象と向き合う自分自身と厳しく向き合う——誤解を恐れずに言えば、これが定形先生のいわば臨床国際政治学の流儀ではないでしょうか。

研究者として学問に、そして自分自身に厳しい一方で、周りにはつねに

気遣いと気配りを忘れないのが、人としての定形先生です。先生は、新天地でも研究と教育を通じて「根底から容赦なく、真理を語る」ことをやめず、われわれ同志を鼓舞し続けることでしょう。先生の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

定形衛先生 経歴と業績

【学歴】

- 1953年11月30日 群馬県生
1977年3月 埼玉大学教養学部教養学科卒業（教養学士）
1980年3月 金沢大学大学院法学研究科修士課程修了（法学修士）
1985年3月 神戸大学大学院法学研究科博士（後期）課程単位取得満期
退学

（この間1980年9月～1982年6月ベオグラード大学政治学部にてユーゴスラヴィア政府給付奨学金奨学生）

【職歴】

- 1985年4月 大分大学経済学部助教授（1990年3月まで）
1990年4月 金沢大学法学部助教授（1995年3月まで）
1995年4月 金沢大学法学部教授（1998年3月まで）
1998年4月 名古屋大学法学部教授（1999年3月まで）
1999年4月 名古屋大学大学院法学研究科教授（2019年3月まで）
2004年4月 名古屋大学大学院法学研究科総合法政専攻長（2005年3月まで）
2005年4月 名古屋大学大学院法学研究科評議員（2007年3月まで）
2012年4月 名古屋大学大学院法学研究科研究科長（2014年3月まで）
2019年3月 名古屋大学大学院法学研究科 定年退職

この間1986年8月～1987年6月ブルガリア科学アカデミー歴史学研究所（日本学術振興会研究者派遣事業）、1993年11月～1994年10月ザグレブ大学政治学部（国際交流基金研究者派遣事業）にて海外研修

【研究業績目録】

【著書（単著）】

『非同盟外交の終焉とユーゴスラヴィア』（風行社・1994年）261+v 頁

【共編著書】

『国際関係論のパラダイム』（初瀬龍平・定形衛・月村太郎共編、有信堂高文社・2001年）
288+vi 頁

【著書（分担執筆）】

- 「ユーゴスラヴィアの外交：非同盟外交の論理と実践」（木戸翁との共著、馬場伸也編『ミドルパワーの外交：自立と従属の葛藤』（日本評論社・1988）141-191 頁
- 「非同盟外交」柴宜弘編『もっと知りたいユーゴスラヴィア』（弘文堂・1991年）75-93 頁
- 「ユーゴスラヴィアの民族問題」高田和夫編『パレストロイカ：ソ連・東欧圏の歴史と現在』（九州大学出版会・1991年）259-276 頁
- 「地球時代の政治学—ポスト冷戦と国際システムの変容」河田潤一編『現代政治学入門』（ミネルヴァ書房・1992年）275-296 頁
- 「国民国家と民族の共生」高田和夫編『国際関係論とは何か：多様化する「場」と「主体」』（法律文化社・1998年）148-171 頁
- 「アフター 91 年の国際政治」柳沢英二郎著『逍遙 現代国際政治史の世界』（柘植書房新社・2002年）202-226 頁
- 「戦争責任と戦後賠償問題」池明観 [ほか] 編著『日韓の相互理解と戦後補償』（日本評論社・2002年）87-105 頁
- 「ユーゴスラヴィアの崩壊と非同盟外交」佐原徹哉編『ナショナリズムから共生の政治文化へ：ユーゴ内戦 10 年の経験から』（北大スラブ研究センター・2002年）43-57 頁
- “‘Intervention Theory’ and the Fragmentation of Yugoslavia”, in V. Franicevic and H. Kimura eds., *Globalization, Democratization and Development* (Zagreb, MASMEDIA・2003) pp.223-235
- 「NATO のコソヴォ空爆とユーゴ紛争」菅英輝編『21 世紀の安全保障と日米安保体制』（ミネルヴァ書房・2005年）230-245 頁
- 「西バルカンと EU/NATO」羽場・小森田・田中編『ヨーロッパの東方拡大』（岩波書店・2006年）295-312 頁
- 法政論集 282号（2019）

- 「日本の戦争責任と東アジアの国際関係論」初瀬龍平・野田岳人編『日本で学ぶ国際関係論』法律文化社・2007年）59-66頁
- 「エスニシティと国際関係」高田和夫編『新時代の国際関係論—グローバル化の中の「場」と「主体」』（法律文化社・2007年）101-125頁
- 「戦争の記憶と子ども—ボスニア学校教育を事例に」初瀬龍平・松田哲・戸田真紀子編『国際関係の中の子ども』（御茶の水書房・2009年）135-146頁
- “Comparative Neighbouring Policy between Serbia and Japan”, *Contemporary Geostrategic Surroundings in Serbia* (Belgrade, Medija Centar Odrbna・2010) pp.41-47
- “Border Implications in the Contemporary Age: the case of the former Yugoslavia and Southeast Europe” in D. Dimitrijevic, I. Ladjevic eds., *Japan and Serbia: Regional Cooperation and Border Issues: A Comparative Analysis* (Belgrade, Institute of International Politics and Economics・2011) pp.9-18
- “New Regionalism and Border Problems: A Comparison between Southeast Europe and East Asia”, in Kyung Hee Institute for Human Society, Kyung Hee University, Meijo Asia Research Center, Meijo University, School of International Relations and Public Affairs, Fudan University co-eds., *Regional Dynamics in East Asia: Issues and Perspectives*, (Seoul, Hunda・2012) pp.23-32
- 「対外政策—EU・NATO 加盟と南東欧地域協力」、 「ICTY への対応—クロアチア民族主義とヨーロッパ・アイデンティティ」柴宜弘・石田信一編著『クロアチアを知るための60章』（明石書店・2013年）147-150頁、156-159頁
- 「旧ユーゴスラヴィアの終焉と人間存在の変容」初瀬龍平・松田哲編『人間存在と国際関係論：グローバル化のなかで考える』（法政大学出版会・2015年）289-315頁
- 「戦争の記憶と子ども—ボスニアの学校教育を事例に」初瀬龍平・松田哲・戸田真紀子編『国際関係のなかの子どもたち』（晃洋書房・2015年）143-156頁
- “Yugoslav Heritage and Serbian Foreign Policy”, in B. Djordjevic, T. Tsukimura and I. Ladjevic eds., *Globalized World: Advantage or Disadvantage* (Belgrade, Institute of International politics and Economics・2016) pp.58-68
- 「木戸霧—社会主義国際政治論と権力政治の克服」初瀬龍平・松田哲他編『国際関係論の生成と展開：日本の先達との対話』（ナカニシヤ出版・2017年）165-177頁
- 「SFRJ 解体後のセルビア共和国とモンテネグロ」月村太郎編著『解体後のユーゴスラヴィア』（晃洋書房・2017年）93-128頁

【共訳書】

E・カルデリ著『民族問題と国際関係の理論』（高屋定国氏との共訳）（ミネルヴァ書房・1986年）iv+234pp

【論文・研究ノート】

- 「非同盟運動の軌跡」『国際問題』245号（日本国際問題研究所・1980年8月）19-39頁
- 「ユーゴ非同盟外交の論理」『六甲台論集』30巻1号（神戸大学大学院研究会・1983年）31-48頁
- （研究ノート）「ユーゴスラヴィアにおける非同盟研究の動向」『国際政治』74号（日本国際政治学会編、有斐閣・1983年）154-166頁
- 「第六回非同盟諸国首脳会議」『国際年報1979-80』（日本国際問題研究所・1985年）102-109頁
- 「積極の平和共存についての一考察」『六甲台論集』31巻1号（1984年）82-93頁
- （研究ノート）「非同盟と中立」『国際法外交雑誌』83巻3号（国際法学会編・1984年）44-63頁
- 「非同盟とヨーロッパ」『六甲台論集』31巻4号（1985年）128-144頁
- 「ポスト・チトーとユーゴ非同盟外交」『大分大学経済論集』37巻3号（大分大学経済学会・1985年）42-62頁
- 「コソヴォ問題についての覚書」『大分大学経済論集』37巻4・5号（1986年）315-330頁
- 「試練に立つ非同盟外交」『大分大学経済論集』38巻1号（1986年）50-71頁
- 「アジア・アフリカ『精神』とユーゴ非同盟外交」『大分大学経済論集』38巻3号（1986年）51-68頁
- 「ユーゴスラヴィア—民族問題と非同盟外交」『国際政治』86号（日本国際政治学会編、有斐閣・1987年）54-67頁
- 「80年代のユーゴスラヴィア外交」『大分大学経済論集』40巻3号（1988年）101-119頁
- 「『バルカン化』についての覚書（1）—バルカン戦争（1912-1913年）を中心に」『大分大学経済論集』39巻6号（1988年）136-147頁
- 「国際共産主義運動と非同盟外交—ユーゴの対ソ連、中国外交（1977-78年）」『大分大学経済論集』40巻4・5号（1989年）227-240頁
- 「アジア・アフリカ連帯運動と中ソ論争—アジア・アフリカ会議と非同盟会議のはざま—」『国際政治』95号（日本国際政治学会編、有斐閣・1990年）115-130頁
- 「国際化時代の地域外交」『研究所報』23号（大分大学経済研究所・1989年）75-124頁

- 「社会主義連邦国家の国家主権問題－ユーゴスラヴィアの対ソ外交と党・国家関係－」
『国際政治』101号（日本国際政治学会編、有斐閣・1992年）51-71頁
- 「戦後国際政治の変動と非同盟運動」『金沢法学』34巻1号（金沢大学法学部・1992年）
125-149頁
- 「ユーゴスラヴィアの民族紛争」『ソ連研究』13号（日本国際問題研究所・1993年）
38-51頁
- 「ユーゴスラヴィア非同盟外交の理論とその変遷」『金沢法学』36巻1・2合併号（1994
年）79-127頁
- 「1990年のクロアチア複数政党選挙の一考察」『金沢法学』40巻2号（1998年）35-64頁
- 「コソヴォ危機と50年目のNATO」『法律時報』1999年8月号（日本評論社・1999年）
24-28頁
- 「『チトー主義』の崩壊とその意味－コソヴォ問題とミロシェヴィッチ登場を中心に」『ロ
シア研究』29号（日本国際問題研究所・1999年）23-37頁
- 「コソヴォ紛争とNATO空爆」『国際問題』483号（2000年）27-40頁
- 「第二次高成長下の市政と市議会－徳田市政第二期－」『金沢市議会史 下』（金沢市議
会編集・発行、2000年）、523-636頁
- 「60年代ユーゴスラヴィアの内政と外交」『国際政治』126号（日本国際政治学会編、
有斐閣・2001年）102-116頁
- 「旧ユーゴスラヴィア終焉の諸相－連邦・民族・国際社会」『国際問題』496号（2001年）
2-14頁
- “Nation Building and the Role of International Organizations” in *Unity in Diversity* (Japanese
Society of International Law and the Nagoya University’s Research Project on the Legal
Assistance in Asia・2003) pp.325-334
- “Regional Governance: Lessons from European Involvement in Yugoslav conflicts”, *Japanese
Journal of Political Science*, 4 (2), (Cambridge UP., 2003) pp.315-329
- 「コソヴォのNATO空爆と人道的介入」『名古屋大学法政論集』202号（名古屋大学法学
研究科・2004年）353-386頁
- 「ユーゴスラヴィア紛争とチトー主義再考」『アソシエ』16号（御茶の水書房・2005年）
55-63頁
- 「ユーゴにおける『介入』の変遷と国家の統合・解体」『研究論集』第3集（河合文化
教育研究所・2006年）123-134頁
- “Humanitarna Intervencija i Americka Spoljna Politika prema Balkanu” (in Serbian),

- Nacionalni Interes*, No.2, (translation by editorial board, Belgrade, Institute for Political Studies · 2006) pp.145-164
- “The Balkans between the EU and NATO”, *Romanian Journal of European Affairs*, 6(3), (Bucharest, European Institute of Romania · 2006) pp.38-45
- 「旧ユーゴ紛争と平和構築の課題—危機後の10年間を振り返って」『国際問題』564号 (2007年) 34-42頁
- 「民主化過程における社会主義の断絶と継承：旧ユーゴスラヴィアの場合」小野・定形編『法整備支援と体制移行・比較政治体制論』（研究成果報告書、第6巻）（名古屋大学法政国際教育協力研究センター・2007年）209-234頁
- 「旧ユーゴ紛争とディアスポラ問題：クロアチアとコソヴォを事例に」『名古屋大学法政論集』224号（2008年）207-237頁
- “Croatia between the Euro-Atlantic Partnership and the SEE Cooperation”, *Licosec* (Language Culture contextual Studies in Ethnic Conflicts of the World), Vol.6 (Osaka University · 2009) pp.74-79
- “Serbian Diplomacy in the Balkans”, *Licosec*, Vol.7 (2009) pp.20-26
- 「東アジア地域主義の可能性と日本外交」『名古屋大学法政論集』239号（2011年）203-225頁
- “New Border Studies and Its Implications in Southeast Europe”, *Licosec*, Vol.17 (2011) pp.133-142
- 「旧ユーゴスラヴィアと境界線問題の諸相」『名古屋大学法政論集』245号（2012年）383-408頁
- “New Regionalism, Border Problems and Neighboring Policy: A Comparison between Southeast Europe and East Asia”, *Serbian Political Thought*, Vol.7, (Belgrade, Institute for Political Studies · 2013) pp.5-20
- 「旧ユーゴスラヴィアにおける『暴力と利益』の国際政治学」『名古屋大学法政論集』255号（2013年）199-221頁
- 「柳澤国際政治史学とユーゴスラヴィア＝ソ連論争」『研究論集』第12集（河合文化研究所・2015年）79-109頁
- 「旧ユーゴスラヴィアの遺産と現代セルビア外交」『名古屋法政論集』269号（2016年）227-247頁
- 「チトーイズムの遺産とボスニア内戦」『名古屋大学法政論集』272号（2017年）1-23頁

【書評・紹介・文献紹介ほか】

- A. ブラウン著『バルカン小国の安全保障』(Aurel Braun, *Small-State Security in the Balkans*, Macmillan, London, 1983, xi+334pp.)、『国際政治』84号、1986年、167-171頁
吉川元編『予防外交』(三嶺書房、1999年)、『国際法外交雑誌』、99巻5号、2000年、156-159頁
- 久保慶一著『引き裂かれた国家－旧ユーゴ地域の民主化と民族問題』(有信堂高文社、2003年)、『平和研究』29号(日本平和学会編・2004年)208-212頁
- 岩田昌征『ユーゴスラヴィア－衝突する歴史と抗争する文明』(NTT出版、1994年)『千葉経済研究』第10巻第1号、1995年、159-167頁
- 吉川元著『国家安全保障論－戦争と平和そして人間の安全保障の軌跡』(有斐閣、2007年)、『国際法外交雑誌』107巻3号、119-123頁、
- 佐原徹哉『ボスニア内戦』有志社、2008年、(書評 比較政治・政治史(ロシア・東欧)対象)『年報政治学』61巻1号、2010年、230-231頁
- 「学界展望 1996年：ロシア・東欧、西アジア・アフリカ」『年報政治学』48巻、1997年、245-246頁
- 「学界展望 2002年：国際政治」『年報政治学』54巻、2003年、285-288頁
- 「学界展望 2005年：国際政治」『年報政治学』57巻1号、2006年、300-303頁
- (国際問題文献紹介)「病めるソビエト帝国」『国際問題』307号(1985年10月)64-65頁
(国際問題文献紹介)「平和研究二五年」『国際問題』308号(1985年11月)69-70頁
(国際問題文献紹介)「非同盟諸国間の紛争」『国際問題』(1986年1月)、51-52頁
(国際問題文献紹介)「ホジャ以後のアルバニア」『国際問題』313号(1986年4月)、59-60頁
(国際問題文献紹介)「西欧におけるイスラム化」『国際問題』320号(1986年11月)、77-78頁
(国際問題文献紹介)「ゴルバチョフと東欧」『国際問題』331号(1987年10月)、63-64頁
(国際問題文献紹介)「アメリカ、力の限界－ニクソンからレーガンまで」『国際問題』337号(日本国際問題研究所・1988年4月)80-81頁